

論文内容要旨

シェーグレン症候群の診断における口唇腺生検の意義についての研究

神奈川歯科大学 顎顔面外科学講座

研究生 河野伸二郎

(指導： 久保田英朗 教授)

論文内容要旨

最近、Sjögren's International Collaborative Clinical Alliance (SICCA) から新しい Sjögren 症候群 (SS) の診断基準が示され、米国リウマチ学会 (ACR) で承認され ACR 基準として発表されている。この診断基準の中で、口唇腺生検 (LSGB) は SS の診断に最も重要であると考えられている。本研究では、口腔乾燥を主訴に本学附属病院を受診した患者を対象に、LSGB 病理検査が SS の診断率に与える影響を後ろ向きに調査し、LSGB に関して、1999 年日本厚生省シェーグレン症候群改訂診断基準 (JPN 基準) と ACR 基準の病理組織学的な見解の相違についても検討した。

2010 年 4 月以降、申請者の教室では口腔乾燥を主訴に外来を受診する患者に積極的に LSGB を導入し、SS の診断に供してきた。そこで今回、2007 年 4 月から 2010 年 3 月までに受診した口腔乾燥患者 (I 群) と積極的に LSGB を取り入始めた 2010 年 4 月から 2011 年 9 月までに受診した口腔乾燥患者 (II 群) の SS 診断率を比較してみた。統計処理にあたり、前者 233 名と後者 122 名の両群間の年齢及び性別分布に相違がないことを確認した。SS は、JPN 基準に従って診断した。LSGB の陽性率は I 群で 54.8%、II 群で 68.0%であった。他の口腔検査、眼科検査、血清学的検査では差が認められなかった。SS 患者の陽性率を両群間で比較すると、I 群で 8.2%、II 群で 17.9%と有意に増加していた。これらの結果から、SS 患者の正確な診断には、LSGB の的確な診断が欠かせないことが考えられた。

SS における LSGB は、血管周囲または導管周囲に存在するリンパ球浸潤をみており、ACR 基準では、リンパ球のフォーカスが腺房細胞と隣接して存在していることが SS に特徴的な所見 (FLS) であるとしている。一方、JPN 基準では、導管周囲に 50 個以上の巣状リンパ球浸潤 (フォーカス) を認めることとしており、腺房細胞が十分量存在していることについては言及していない。LSGB で FS1 以上を示した 30 例の SS 患者の病理組織像を検討した結果、9 例 (13%) のみが ACR 基準の病理組織像に該当する所見 (FLS) を呈していた。しかし、抗 SS-A 抗体ならびに ANA 抗体価が非常に高く、潜在的に自己免疫疾患が強く疑われる症例に ACR 基準で示される FLS に該当しない症例が存在することがわかった。診断基準上のこれらの相違は、SS の診断率にも少なからず影響するものと思われる。

これらの結果から、SS 患者の正確な診断には、LSGB の的確な診断が欠かせないことが示唆された。